

民族舞踊文化



No.4

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F 電話03-3583-3633(代)



1990年10月 IOV総会

今

黛民族舞踊文化財団
理事長 黛 節子

民族芸術は“自然”と“土”とを土台とし、その地で生活を営む人々の精神を反映したものに外ならない。それは自然の恵みと試練の中で育まれてきたものでもある。

逆らうことの出来ぬ自然の力と、愚かな人間社会の醜い争い。不安と絶望の渦巻く現実社会にあって、それでも希望と勇気を持って生きてきた人々の、心の軌跡といってもいいのではないだろうか。

人は自然を超える力を得る術として、科学する方法を学んだ。しかし、今回の湾岸戦争でもわかるように、一度事が起きれば科学で得た知識は、地球そのものを破壊しかねない力を持っている。

本来文化とは、人間の生みだした知恵の総称であり、科学も文化の一端であるにも係わらず、使い方次第では人間そのものを破壊させかねない。

芸術文化は、こうした揺れ動く人の心のなかにおいて、抑止

力を発揮すべき筈のものだが、時代の流れはあまりにも速く、ともすれば考える隙を与えない程のテンポで物事は進んでいる。その大半は、大勢のスタッフと莫大な資金によって運用され、一人の人間の思考や技術が入り込める余地は殆ど無いといっている。

“自然”と“土”を土台として育まれてきた民族芸術の精神が今程必要とされる時代はないように思える。にもかかわらず、現実はいくつもの精神の在り方をより難しいものになっている。

民族芸術は家内工業的な生き方を良しとしてきたが、今や芸術の内容を維持しながら、それを脱皮したところで生きてゆかねばならない局面を迎えたといえる差支えない。

世界の民族芸術家が歩を共にし、各民族がそれぞれの民族の特異性を理解し、愛情を傾けることにより、平和達成への道が開かれるのではないだろうか。日本の民族芸術もそうした観点から、国際社会への参加を求められているのだと思う。

ライス・ロードの舞踊家たち

[1990年8月30日～9月9日 一訪日招聘一]

中国舞踏家協会雲南分会と黛民族舞踊文化財団が、相互に行っている雲南少数民族と、日本の民族舞踊の隔年交流事業は、年と共にその密度の輝きを増し、力強く根深いものとなりつつある。

この交流事業のきっかけとなったのは、去る1984年日中文化交流協会の招聘で「中国文学芸術界連合会代表团」の一員として来日された周倍武先生（中国舞踏家協会雲南分会理事）のお力添えによるものであった。

照葉樹林文化の中で、農耕に生き、とりわけ赤米、紫米、黄米等を作ってきた農耕少数民族の残した舞踊文化と、同じく稲作農耕民族である我々日本民族の伝え残してきた舞踊文化とは、どこかで一筋の糸で結ばれているように思われる。

この二つの文化を、舞踊を通じて解きほぐすことが出来れば、ライス・ロードの軌跡が新たな形を伴って、私達の目の前にその姿を現すのではないだろうか、という動機から始められた事でもあった。

少数民族の生活風習等は、最近テレビ等でもしばしば取り上げられ、我が国の風俗習慣との類似点もあり、一般の関心もかなり高まっているように思われる。

昨年は当財団が中国側を招聘する番で[今回で6度目]、ライス・ロードの舞踏家一行7名を8月30日～9月9日の間、日本に招聘した。

団長は中国舞踏家協会雲南分会常務副主席、劉金吾女史。女史自身二度目の来日だが、当財団訪中の際は常に我々と行動を共にして下さるので、始終お会いしている気がしている方である。

副団長は雲南芸術学院副院長の王福玲女史(漢族)。この方の笑い方は特に美しく、まさに鈴を転がすという形容がぴったりといった感じの方であった。

朱蘭芳女史(傣族)は、新節の水かけ祭で有名なシーサンパンナを訪れる度、お目にかかっているが、傣族独特のテクニックは流石と思わせるものがある。

刀学明氏(傣族)は体型も顔もまろやかで、いつも笑顔を絶やさず温厚な方。この方は刀舞の名手で、刀を扱う時の手首や足首の動きの滑らかさは絶妙である。これも氏の体がことの他柔軟だからと思われる。

李建国氏(拉族)は、先年当財団の招聘で来日された象脚鼓(太鼓の一種で、傣族は好んでこれを見事に奏す)の名手、岩宰氏(思茅地区民族歌舞団団長)の歌舞団に所属し、今回は芦笙舞を披露してもらった。芦笙は雅楽の笙に似た楽器であるが、これを吹きながら中腰で踊る為、大変体力を必要とする。

然し、たゆまぬ練習によって身に付けた技術は、芸術作品として我々を堪能させるに充分なものであった。

馬麗娜女史(回族)は、宗教の関係から豚肉を食べない、つまりイスラム文化圏の民族であると推察出来るが、只、彼女の場合漢族の方と結婚した為、現在はその習慣に囚われないとのこと。すんなりした肢体と透き通るような肌の彼女は、一見なよなよとして頼りなげだが、その実、物凄い情熱家であり、激しい感性を秘めた女性であることが分かった。大きな声で話しくよく笑う様子は、舞踊家としてうってつけの性格のように思えた。たまたま今回は新田日本海ガス社長の御好意で、一行を9月2～3日、越中富山の“風の盆”に取材案内することが出来たが、そこでも彼女の目を据えて頑張る姿が印象的であった。

黄志玲女史(哈尼族)。他の少数民族も概してそうであるが、特にこの民族はカラフルな民族衣装を持ち、多角的な表現の民族舞踊を数多く持っている。我が国では海浜で使うような、麦藁帽子を手にして踊る“草帽舞”も、そうした色彩の濃い作品であった。今回彼女が踊った“哈尼姑娘”は、“私はもうお嫁に行ける程成長したのよ。”といった意味の踊りだったが、可愛いく、コケットリーで活力に満ちた踊りだった。でも素顔の彼女は国に残してきた赤ちゃん(李ちゃん)の事を思い、“李ちゃん”と呼んでは泣くの”とそっとつぶやく優しいママさんでもあった。

今回の『交流舞踊の夕』(8月31日、9月1日)のフィナーレではシーサンパンナに於ける新節(新年)で踊られる[水かけ祭](木の枝と水入れを持ち、木の枝で水入れの水を互いにかけて合い、災いを払い、福を招くことを願う行事)を、観客を含め一同輪になって一緒に踊った。

楽しかった数多くのスケジュールも無事終わり、成田空港では互いに“再会”!“再会”!を叫びあった。

いつも大きな仕事を見事にやりぬく劉副主席が、“高興(嬉れしかった)再会”!と泣きながら抱きつかれる姿は、私達にとっても初めての思いであった。それ程までに私達の心意気を感じとって下さったのかと思うと、私達も涙を押さえることが出来なかった。

“いつ迄も、いつ迄も、お互いに民族舞踊の為に一緒に生きて行きましょう”。私達は心の中でこう叫んだ。そして、これこそ国を超え、民族を超えた、まこと人間同志の心と心の結びつきなのだ、ということを実感した。



訪日代表团、文化庁に遠山次長を表敬訪問

感性の強い馬麗娜さんは、とうとう最後まで顔を上げることが出来なかった。……

お別れの最後の言葉は「心、心、好」。お互い言葉は通ぜずとも、真意は充二分に理解し合うことが出来る。例え僅かな日本滞在とはいえ、舞踊を通じ人間と人間の心がこれ程迄深いきずなで結ばれるとは、正に素晴らしいの一語に尽きる。民族同志、民族芸術のおかげで確りと心の繋がりが出来る。その心は実に美そのものといってよいのではないだろうか。勿論中国だけとは限らない。

私達は飛び去って行く飛行機に、もう一度心を込めてつぶやいた。「心、心、好」と。

中国雲南省舞踏家協会

第4回、訪日代表団日程

1990年

8月30日(木) 15:20 成田着
18:30 歓迎会 於 黛アート・サロン

8月31日(金) 18:30 日中民族舞踊交流会
於 黛アート・サロン

9月1日(土) 14:00 日中民族舞踊交流会
於 黛アート・サロン

9月2日(日) 9:13 上野発富山行き
富山“越中おわら〔風の盆〕”見学

9月3日(月) 日中民族舞踊交流会

9月4日(火) 15:00 富山発東京行き 帰京

9月5日(水) 東京ディズニーランド
遊覧

9月6日(木) 東京近郊観光

9月7日(金) 文化庁、中国大使館
表敬訪問
14:00 雲南少数民族舞踊の
公開レッスン

9月8日(土) 14:00 雲南少数民族舞踊の
公開レッスン
夜 歓送会

9月9日(日) 14:55 成田発 帰国



劉団長（左）と王副団長を囲んで

雲南省舞踏家協会訪日代表団

1. 劉 金吾(団 長) 中国舞踏家協会雲南分会常務副首席
2. 王 福玲(副団長) 雲南省舞踏家協会副首席
雲南芸術学院副院長
3. 朱 蘭芳(団 員) 中国舞踏家協会会員
西双版纳傣族自治州歌舞団芸術指導
4. 刀 学明(団 員) 雲南省舞踏家協会理事
西双版纳傣族自治州歌舞団編導
5. 李 建国(団 員) 雲南省舞踏家協会会員
思茅地区民族歌舞団俳優
6. 馬 麗娜(団 員) 雲南省舞踏家協会会員
保山地区民族歌舞団俳優
7. 黄 志玲(団 員) 雲南省舞踏家協会会員
瀾滄県民族歌舞団俳優



左から黛理事長、文化庁渡辺文化部長、劉団長

民族舞踊の交流が私たちを強く結びつけた

[1990年9月9日 一訪日日記一]

雲南省舞踏家協会常務副主席

訪日代表団団長 劉 金 吾

短い10日間は、友誼と歓迎の渦の中で過ぎて行った。飛行場でお別れしたときの情景が私の心を激しく揺さぶっている。飛行機は成田空港をゆっくり飛び立った。黛節子先生との友好交流の場面が次々と目の前に浮かんだ。私は目を閉じて、美しい数々の思い出に浸った。

民族文化は民族の精神の象徴であり、民族の社会生活の反映である。民族文化は民族の感情、願望、理想を集中的に表現している。特に舞踊は、それぞれの芸術分野と比べて、言語、文字の制限を受けないので、国際間の交流と合作に適している。舞踊の形を通じて、すぐに相互に理解し、意志を疎通することができるので、以前から国際交流の重要な手段であった。舞踊は世界各国の交流と合作に、積極的に貢献してきた。

中日両国は一衣帯水の隣国であるので、歴史の上でも、頻繁な文化交流があり、数え切れない程の逸話が伝わっている。1985年以来、私たちは、黛節子先生と進めてきた民族舞踊の交流を通じて、相互に理解しあい、中日両国の舞踊に携わる者の間に、友好という大きな橋をかけた。

いま、私は、黛節子先生が美しいシーサンパンナでジノ一族の民間舞踊家からジノ一族の太鼓の踊りを習っていたこと、路南石林でイ族の舞踊家の踊り「阿細跳月」を鑑賞されたこと、雲南歌舞団の稽古場で黛先生が私たちに「麦屋節」を教えてください、また、私たちが玉川大学で学生達に雲南の民族舞踊をお見せし、その手ほどきをしたこと、三浦で民間舞踊を見せていただいたことなど、交流の一つ一つを次々に思い出している。特に忘れられないのは、9月2日の夜、富山県の越中八尾で「風の盆」の踊りの競演を見せていただいた事である。

これは私に深い印象を与えてくれた。老人、青年、子供たち、みんなが踊りに加わっていた。二、三歳の子供までが民族衣装を来て大人の後ろで一生懸命踊っていた。数万人の観衆は秩序正しく、熱心に踊りに見入っていた。観衆には、違った文化層の人がおり、職業も違うさまざまな人々がいる。しかし彼らは舞台の上の踊りに絶え間なく、熱い拍手を送っていた。このとき私は民族舞踊の威力を感じた。民族舞踊はそれが生まれたそのときから、人々の生活の一部となり、人民大衆の中で民族の精神を表現するものとなった。一つの民族について言うならば、それは民族を凝集する作用をしている。そのことはいかなる現代舞踊もこれに替わることはできない。近代化された今日、このような民族の凝集力とそれが転化して形成された民族の自信と誇りは、欠くことのできない精神的な力となっている。

越中八尾の「風の盆」は私に雲南ジノ一族の大きな祭り「木脳縦戈」を思い出させた。母親は息子を背負い、おばあさんは孫を背負い、酔った様に踊り狂う。イ族の祭り万人「打歌」もさらに盛大で、「朝から日が落ちるまで踊り、舞い上がる黄土に足もとも見えず」と言った具合に……。

私たちが数十年苦勞し、そしてまだ続けて行かなければならない仕事がある。みんなが愛している民族舞踊をまもり、それを伝え、さらに時代の進歩とともにこれを発展させることである。私たちと黛節子先生は、正にこのような偉大な事業に携わっているのである。志を同じくするもの同士の絶えまない交流の中で、私たちは深い友情で結ばれた。

さようならお友達 私たちはまた会えるのです。なぜなら私たちが共に奮闘している民族舞踊の仕事が私たちを強く結びつけているから。

飛行機はまもなく上海空港に降りようとしている。私は心の中で遠い友人に祝福を送った。来年、常春の昆明であなたがたをお迎えする日を待っています。



劉団長と黛理事長



訪日代表団一行



新田日本海ガス社長（中央）と北日本新聞社長敬訪問



訪日代表団との交流風景



Dr. マハディール IOV 会長と黛理事長

IOVと私

黛 節子

IOV (INTERNATIONALE ORGANISATION FUR VOLKSKUNST) 国際民族芸術組織に参加するきっかけとなったのは、今から約三年前、中国舞踏家協会理事 賈作光女史及び、中国舞踏家協会雲南分会副首席 劉金吾女史の御二人の御紹介によるものだった。

IOV本部はオーストリア・メートリンクにあり、参加国132ヶ国、会員数1800名から成り、それぞれが自国の民族芸術への情熱を燃やしている人々の集まりでもあった。

私は何よりも、民族芸術の為に骨身を惜しまないで努力しようとするその姿勢に心ひかれた。

日本の民族芸術もこのような組織のなかで、積極的に発言、吸収し交流を深めることにより、世界の中の一員としてアピールすることの必要性を感じた。

たまたま、前記のような経緯から昨秋開催されたIOV総会からの招聘を機に、国際会議への参加を決めた。それは、若い頃から私の心の中に漠然とくすぶっていた日本の民族芸術の、インターナショナル化にも結びつく良い機会であるような気がしたからでもある。

更に、総会開催の場所が、魅力あるウィーンの近郊メートリンクだったことも、私の重い腰を上げさせる大きな理由の一つだったかもしれない。

これを機に、民族芸術を愛し発展を夢見る世界の人たちのお仲間入りと、といった軽い気持ちで出掛けた私だったが、出席し結果は、この世間みずな私に途方もない衝撃を与えた。

会議冒頭の開会式では、各国代表がそれぞれの国の民族衣装に身を包み、一同揃ったところは流石壮観であったが、同時にこれだけ異なった風俗、異なった言葉を持つ人々が、互いに理解し合うというのも大変なことだと痛感した。

事実一緒に出席したニュージーランドの代表は、私に“貴女は何も発言しませんでしたね”と問いかけた。“だって、この会

の内容がまだ何もアンダースタンドしていないんだから”と笑ったら、彼女も肩をすくめて笑い返した。そして友達のしるしに、ニュージーランドの魔除けのペンダントをプレゼントされた。彼女いわく“これを身につけてニュージーランドへいっちゃい。幸福を呼ぶと言われているの、きっといいことがあるわよ。もしかしたら海岸の砂を掘ると石油が出るかも。そうならば貴女も凄い財閥……”“そうになったらIOVへお金がどんどん運べて私も嬉しい!”といったら、傍にいたカナダ代表氏も大きな声で“ワッハハハ……”一同大笑い。

夜はオーストリアの民族的雰囲気が充満した、地元のワイン酒場で交歓会。ワインを飲みながら各国代表が、それぞれに自分達の芸を披露し合い、会はいやが上にも盛り上がった。

サウジアラビア代表は、テーブルを叩

きながらのリズム演奏。

かつてサウジアラビアに於けるジャパン・デーで、日本大使のお招きで踊りを御披露に伺った時は、宗教の戒律の厳しさに啞然としたことを覚えているが、まさかこんなにくだけた交流が出来るとは思ってもみなかった。

そのうちに会場のあちこちから“ジャポネ! ジャポネ!”の聲が上がりはじめた。何をしようか、フツと思いついたのは先程のサウジ代表の叩いたリズムの中に、日本の八木節そっくりのものがあったということ。“そうだ!これで踊ってみよう”早速彼にその旨申し出ると、いとも気安く応えてくれた。

“リズムはこれ? それともこれ?”御希望のリズムが出たところで、私は笠の代わりにお盆を手にとり、唄いながら踊り始めた。いつしか全員の手拍子に包まれて八木節を踊り終えた。

国際交流の中での民族舞踊。これも交流の一つのあり方ということを実感として感じた。

IOV総会に出席して思ったことは、こうした国際交流の面で日本は立ち遅れているということ。

日本人はとかく世界の人々とのお付き合いが上手な民族でないことは分かっていたつもりだが、これからはそうとばかりもいってられない。折角ユニークな数多くの民族芸術資産を引き継いできた我々世代が、時の流れに身を任せ無気力に生きるものであれば、みっともないことおびたしい。

確かに今、世界は経済大国日本としてしか見ていない部分が多い。然しそれが事実としたら、お互いに不幸なことだと思う。

身心共に健全な、バランスのとれた民族であることをアピールする大切な時がきたと思っている。



パウアー経済参事官と

IOV総会

1990年10月27日から10月31日迄の5日間、IOV（国際民族芸術組織）の総会が、オーストリア・メートリンク博物館祭事用大広間に於いて開催され、兼当財団理事長はIOVからの招聘を受け出席した。

会議はオーストリア民族楽器のツィター演奏で始まる民族色豊かな雰囲気のなかで進められた。

参加国133ヶ国、設立以来10年目を迎えたこの組織は、この年ユネスコCカテゴリーからBカテゴリーに昇格した。

従って、会議の内容も組織が大きくなったことに因る諸問題の討議に多くの時間が費やされた。なかでも組織の運営資金についての問題は、各国の事情もあり白熱した論議が交わされた。

又執行部の機構についても改革案が提出され、世界各国を次の9ブロックに分割し、それぞれの代表部を置き、組織活動の活性化を図るということが決議された。

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 北 米 | 2. 中 米 |
| 3. 南 米 | 4. 東アジア |
| 5. 西アジア | 6. オセアニア |
| 7. 欧 州 | 8. 北アフリカ |
| 9. 中南アフリカ | |

続いて新委員の選出が選挙管理委員会により行われ、当財団理事長はIOV理事、評議員、IOV国際民族芸術文化援助委員会副委員長、IOV推進基金委員、以上四つの役職に就くことを要請され、理事長はこれを承諾した。

会議は更に次の大きな課題として世界民族芸術フェスティバル開催の可能性と、その方法。

又、現在各国の民族芸術関係者が抱えている問題の報告、提案、要請等が次々に検討され、その内容はどれも世界の政治、経済、環境等を反映したシビアなものであった。つまり世界各国の民族芸術の多くは、現在非常に危機的な状況に直面していることを浮き彫りにした総会でもあった。

会期中ニーダーオーストリア州政府を表敬訪問したり、ワイン酒場での歓迎パーティがあったり、何れも各代表自慢の民族衣装に身を纏い、会場は花が咲き乱れたように華やかな雰囲気に包まれた。

11月1日付けの「KURIER」誌文化欄は次のような見出しで、IOV総会の模様を紹介した。

『民族芸術はアイデンティティー喪失防止の特効薬 —— 文化遺産の分割、文化独自性の強化、観光産業の急進による市場拡張から独自の民族文化を護ること、これらがユネスコ組織の関心事である。4年に一度のIOV総会に集まった各国の代表は、この目的の為に世界のあらゆる地域から集まった人達であり、「衛星からの多様な情報によって、文化的な独自性が瀕死の危機に晒されている時代にあって、人々に独自の民族文化について目を開かせ、自らのルーツに帰してやるのが、我々の目標なのです」と語ったアレクサンダー・ファイグル氏の言葉に要約されている。』



ブラゴリー、カナダ代表と



サウジアラビア代表と



ニュージーランド代表と



ソビエト代表と



黨理事長、ファイグル事務局長、パウアー経済参事官



東欧諸国の代表と

1990年 I O V 総会 日 程

1990年

10月24日(水) 10:30 成田発
17:30 ウィーン着

10月25日(木) 大島駐墺日本大使
表敬訪問

10月26日(金) 大島駐墺日本大使
と会食

10月27日(土) 19:30 IOV 総会 開会式
・ニーダーオース
トリア州代表挨拶
・オーストリア、
ユネスコ代表挨拶
・I O V 会長挨拶
・民族音楽の演奏

10月28日(日) 9:00 総会 第1部

18:00 オーストリア民族
舞踊、歌と音楽(ワ
イン酒場)

10月29日(月) 8:30 ウィーン訪問
・州政府関係各省、
ウィーン市
表敬訪問
・ニーダーオース
トリア州官邸に
於いてレセプシ
ョン

10月30日(火) 9:00 総会 第2部

17:00 記者会見
メートリンク美術
館視察
レセプション

10月31日(水) 8:30 総会 第3部

12:00 閉会式
ウィーン帰着
19:00 シュタッツ・オパ
ー、プリミエ公演
「後宮よりの逃走」
観劇

11月1日(木) ウィーンの森・ワ
イン蔵見学

11月2日(金) 11:25 ウィーン発

11月3日(土) 9:20 成田着

ウィーンの森の物語

黛 節子

若き日、私の生活の中で心に生き続けていたものは、殆ど音楽に関することであった。殊にオーストリアのそれはたまらない程の魅力をもって私の脳裏を行き来した。

モーツァルト、ワルツ、碧きドナウ、ウィーンの森の物語等々……。

なかでもモーツァルトは殊の外好きな曲であった。あの歯切れの良さ、音質の重なり合った中から醸し出す複雑さと華麗さ。それは聞くものをして息をつかせる暇も無く、引き込み、引き摺り廻し、あたかも回転木馬に乗せられた如く飛翔させられたからでもある。

人は彼の音楽を“天使の幾何学”とよぶが、正しくその通りだと思う。流れる音の底辺にある純粹さと、複雑精緻な構造のもたらす透明感は、限り無く深い安らぎを与えてくれた。

その思いが、私自身携わってきた日本の民族芸術に関しても、“天使の幾何学”と称ぶに相応しい高みまで磨きあげたいという強い欲求となって、今日までの私を支えてきてくれたのだと思う。

ともあれ、今回のIOVからの招聘に喜んで参加する気持ちになったのは、オーストリア、ウィーンということもあって、私の心の奥底に潜在していた“美への郷愁”という火薬庫に火が付いたからでもあった。

然しそうはいつでもヨーロッパはやはり遠い。いくら乗物好きの私でも、北廻りのツンドラ地帯を長時間飛ぶのはいささかしんどいな、という思いがしなくてもなかったが、幸い今は直行便があることを知って躊躇の余地は無かった。

フライトは快適だった。最初に御機嫌だったのは先ず機内食のパンが美味しかったこと。些細なことのようなだが、こうした日常の中での一寸した喜びの積み重ねが、次への期待を高めてくれる。お蔭で慌ただしい思いをすることもなく、ゆとりを持ってウィーンの空気を思う存分吸い込むことが出来た。

ウィーンに着いて、まず最初は大島駐墾日本大使を表敬訪問。翌日には大使御夫妻から、昼食の御招待に与かった。木立の中の鄙びたレストランで頂いた御料理の美味しかったこと。話題は自然とモーツァルトになった。大使夫人は“来年の没後200年の催しには、ザルツブルグまで行ってモーツァルトに浸るの”とおっしゃった。“わあ、行きたい！”思わず口をついて出た言葉に、夫人は“あら、御一緒に行きましょうよ”と言って下さった。このことは今でも私の頭の中で渦を巻いていて、恐らく今年の夏の末はザルツブルグにいるのではないかと思う。

大使御夫妻とお別れした後、今回通訳として同行してもらった国塩恭氏の案内で、ウィーンの森をドライブした。

秋の気配は日本よりずっと早く、木々は既に一面黄色に彩られ、車の前後に葉を一杯撒き散らしていた。山道の両側にはワイン蔵を擁したレストランが点在し、酒飲みならずとも雰囲気だけで酔いそうな気分させられた。やがて辿り着いた小高い



ウィーンの森から眺めたウィーン市街

山の頂には鄙びた喫茶店が一軒、展望台を兼ねた格好で建っていた。私達もそこで一休みしたが、目の下に広がる夕暮の靄に包まれたウィーンの街の美しかったこと。高層ビルが少なく、平らな地形にキラキラと灯りが灯っていく様は、本当に長閑で平和そのものといった感じであった。更にもう一つ、私達を幸せにしてくれたのは、そこで戴いたアップルパイとコーヒー。

干し葡萄と胡桃と、薄くスライスした甘酸っぱいリンゴをたっぷり使って、柔らかいパイの皮に包んだアップルパイと、メランジュと呼ばれるウィーン特有の泡立てた牛乳入りコーヒーの取り合わせの素晴らしかったこと。ひけらかさないでいて、ふくよかな味。舌に微かに広がるシナモンの香りを楽しみながら、平和な一刻を過ごした。

翌日から会議の為、一旦ウィーンを離れメートリンクに赴いたが、会議を終え5日後再びウィーンに戻った。

幸いにも、ウィーン・シュタッツ・オペラ・プリミエ公演の切符が手に入ったので、オペラを鑑賞する機会に恵まれた。

演目はモーツァルトの歌劇「後宮よりの逃走」。流石プリミエ公演ともなると、観客は皆申し合わせたようにドレスアップして、場内は豪華な雰囲気包まれる。私も振袖姿で周囲の輪に溶け込むことが出来た。こうしたことは、残念ながら日本では、まだなかなか味わえないが、今回貴重な体験が出来てよかったと思っている。

「後宮よりの逃走」は、音楽は確りして楽しめたが、演出は近代化された舞台構成で、「後宮よりの逃走」の持つファンタスティックな広がりを感じられず、いささか残念な気がした。

翌日は、あのウィーンの森の想いが忘れられず、再び森に車を走らせた。どうやらウィーンの森は私を病み付きにさせそうである。



大島駐墾日本大使と会食

アレクサンダー・ファイグル 事務局長来日

当財団は昨年10月I O V総会に黛当財団理事長が出席したのを機に、世界の民族芸術家との交流の輪を広げる為、I O V事務局長アレクサンダー・ファイグル氏の訪日招請を決めた。

アレクサンダー・ファイグル氏は当財団の招聘を受け、本年1月19日～1月24日の間来日し、関係各機関を訪問、I O Vと我が国民族芸術家との交流強化に就いて意見の交換を行った。

又その間、我が国の民族芸術関係者と懇談し、I O Vの将来と運動に対し、我が国民族芸術家の積極的参加を求めた。



国際交流基金、野村専務理事を表敬訪問

A. ファイグル事務局長との懇談要旨

A. ファイグル氏滞在日程記録

- 1月19日(土) 成田着 来日
沖縄舞踊観劇〔於・国立劇場〕
懇談 I O V 報告〔於・当財団〕
- 1月20日(日) 当財団理事、評議員との懇談〔於・当財団〕
- 1月21日(月) 外務省 小倉文化交流部長表敬訪問
当財団理事 安田扇屋ジャスコ会長表敬訪問
- 1月22日(火) 文化庁 遠山次長、渡辺文化部長表敬訪問
文部省・ユネスコ日本委員会
渡辺大臣官房審議官表敬訪問
I T I 日本センター 戸張理事長表敬訪問
ユネスコ・アジア文化センター 犬丸理事長
表敬訪問
- 1月23日(水) 国際交流基金 野村専務理事表敬訪問
『A・ファイグル氏を囲む懇親会』出席
〔於・当財団〕
- 1月24日(木) 都内見学
成田発 離日

今回A. ファイグル事務局長が来日した主な目的は、凡そ次の三つの問題に関することであつた。

1. I O Vへの日本の協力、支援について
2. I O V日本センター設立について
3. 第一回民族芸術世界大会の日本開催について

加盟133ヶ国、ユネスコ内で4番目の大きな組織となり、ユネスコBカテゴリーに昇格したI O Vだが、組織構成の6～7割が貧しい第三世界の国々であり、組織拡大が組織運営を難しくしている現状報告と、運営資金の行き詰まりに対し、日本の協力を要請された。又日本国内民族芸術関係者の協力を得る為、I O V日本センターの設立が必要であることも討議された。

併せてI O Vが目下計画している最大の事業である第一回民族芸術世界大会を、日本に於いて開催したい旨の希望が述べられた。計画案の概要は概ね次の通り。

- ・開催時期は1993年9月
- ・民族の平和をアピールする為、開催地はできれば広島か長崎。
- ・会期は約10日間

- ・参加国は約90ヶ国
- ・1ヶ国の代表団は5人～35人以内
- ・民族舞踊、民族音楽、民族歌謡、民族衣装等の紹介
- ・特産品、民芸品等の物産展等

この大会は3年毎に開催していきたい。殊に1987年から1997年の10年間は国際文化開発年でもあり、1000年以上の歴史と伝統を持つ日本は、高度成長で経済的にも恵まれ、第一回日の開催国としても最も相応しい国であるとの考えを披瀝した。

この計画は大変素晴らしいが、然し、財団側としても一財団としての負担には限界があり、内容からしても国内関連団体の合意と協力がなければ不可能である旨説明し、先ずはI O V日本センター設立を当面の目標とすることで意見の一致をみた。



外務省に小倉文化交流部長を表敬訪問

七草の宴

当財団主催、平成三年度新春恒例の『七草の宴』が、今年も1月7日赤坂の黛アート・サロンに於いて催された。

会場には多数の方が御参列下さり、新春らしい華やいだ雰囲気となった。

黛節子当財団理事長の挨拶の後、江戸英雄当財団理事の乾杯の音頭で宴は始められ、金光植韓国文化院長をはじめ当財団の犬丸直理事、山脇亀夫理事、加戸守行公立学校共済組合理事長、白鳥芳郎上智大学名誉教授・中国雲南大学名誉教授、小山五郎太陽神戸三井銀行名誉会長の新春賀詞交換の御挨拶が続いた。

途中、黛節子当財団理事長による、奉祝舞踊「祝い唄」が披露され、その後恒例の七草粥の会食が始まった。

今年は、赤米のお粥も炊き、赤粥、白粥の紅白粥による七草粥となった。

“赤米”は、最近一部市販されるようになったが、もともとのお米のルーツに深く関わっていて、中国雲南少数民族舞踊との交流を通して日本民族文化のルーツ、即ち「ライス・ロード」の探究をテーマの一つに取り上げて活動している当財団にとっては、象徴的な意味を持つものでもあり、今後もこうした祈念を籠めた『七草の宴』を続けてゆく予定です。



「祝い唄」



白鳥芳郎上智大学名誉教授の御挨拶



江戸英雄当財団理事の御挨拶



「七草の宴」会場風景



小山五郎太陽神戸三井銀行名誉会長の御挨拶

賛助会員御芳名

(ABC順敬称略)

平成3年3月31日現在

特別賛助会員	桑田 美弥子
有田 平	牧原 満男
森 武雄	黛 莉香
	黛 智英
賛助会員	中田 乙一
遠藤 昌孝	大井 昭伍
遠藤 照子	大野 晃
藤本 佳子	岡本 春雄
藤田 幸子	奥山 素章
長谷川 房子	小田部 康伊
蓮沼 力太郎	冷泉 貴実子
平野 理定	関野 智子
穂 莉 甲子男	鹿海 信也
細野 美智子	清水 とき
稲田 とし子	砂村 采女
石川 隆一	武田 章
菅 寿子	武田 悦子
杵屋 佐登代	竹崎 宇吉
木下 純貫	海野 麻次
北川 太一	内海 陽子
糀 沢 佳乃子	山田 三耀
倉島 攝子	安本 義正

平成3年度 財団事業計画

・民族舞踊公演

日時：8月6日～8日

会場：黛アート・サロン

演目：「日本と韓国の七夕の夕べ」

・民族舞踊に関する国際交流

5月 中国舞踏家協会雲南分会の招聘により、中国少数民族民族舞踊取材、並びに日本民族舞踊の紹介、指導による日中舞踊文化の交流。

8月 韓国の舞踊家を招聘し、日韓両国舞踊文化の交流をはかる。

オーストリアで開催されるIOV理事会に、IOV理事である黛当財団理事長を派遣。

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和六十一年三月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)、また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民族芸能伝承者たちとの交流等、幅広い国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

(財)黛民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、賛助会員とは、この法人の主旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)の方々の名称です。

二、会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます)。

ア、個人の場合

個人会員 五千円以上

特別個人会員 十万円以上

イ、法人の場合

法人(団体)会員 十万円以上

特別法人(団体)会員 百万円以上

三、賛助会員の特典

ア、特別会員(個人・法人)

1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待

2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、会員(個人・法人)

1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛て、御請求くださいませ。領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。

民族舞踊文化 No. 4

1991年5月21日発行

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F Tel 03-3583-3633

財団法人 黛民族舞踊文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE
MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, 107, TOKYO

発行人 黛 節子

編集人 大野明良